



東大の三四郎池を散策（東京・本郷）



2010年6月に発表した小説「母―オモニ―」は発行部数30万部を超えるベストセラーになった。

登場人物はすべて実在です。ただ私が知るべくもない会話や舞台は私が想像して物語を構成したので、自伝的小説と呼んではいけません。熊本で暮らした在日1世の生きざまは、私のアイデンティティーの核心であり、私の人生に大きな影響を与えた。同時に私の人生の極（しつこく）でもあります。私たちが在日2世は1世のいない時代を生きていかなければなりません。彼らの生きた時代を描くことで、心の野辺送りをしたいと思いました。それにより、私たちの人生もリセットできると思ったからです。

大きかった母の存在、在日1世の記録を小説に

不安定さが増す世界、「悩む力」の続編も予定

南北統一が実現しハーレーで縦断するのが夢

ないといかんばい」と、よくしかられました。それと祖母から教えられたのか、「夏も近づくと八十八夜」で始まる茶摘みの歌や「なんだ坂こんな坂」歌う汽

メルヘンにしたいと思っ

らしていた事実は、郷土史などにも詳しい記録が書かれていない。彼らが生きた証しを文章に残しておきたいと思ったのです。

05年4月に亡くなった母は、私にとつて圧倒的に大きな存在でした。私はマザコンだったと言ってもいい。「何とかなるばい」が口癖で、神経質な性格なのに、最後はどんな苦境にもめげない強い部分もある不思議な人でした。遠くばかり見ていないで、近くば見

車ぽっぽの歌をよく口ずさんでいたことを思い出します。実は「母」を第1作とする3部作の小説を書こうと計画しています。現在、雑誌に連載中の「新・君たちはどう生きるか」が第2作で、大学生を主人公にして、有名な吉野源三郎の「君たちはどう生きるか」の向こうを張った小説です。今年秋までの連載で、13月初めには完成作として発表できるようにしよう。さらにその次の第3作は

ではなく、エキストラの通行人の一人。もしくは端役の悪人。変身願望ではありませんが、自分のイメージとは正反対の個性派の悪役を演じてみたい。私の小説「母」が映画化されたら、ぜひ出演してみたいですね。

日韓の絆を強める

⑤

次回は映画評論家の秦早穂子さん

（聞き手は編集委員 木戸純生）